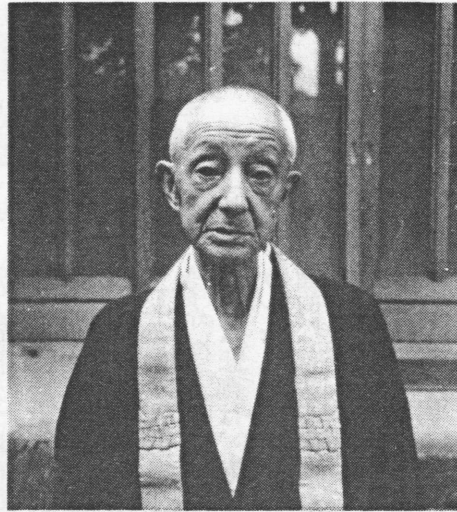


# よりだ寺福廣

5号



## 悼追住前集特

当山第十四世前住職は昭和五十八年十月十四日午後四時七分急性腎不全のため八十四歳（数え年八十六歳）で死去いたしました。前年九月県立吉田病院で精密検診の結果胆石が見つかり療養を続けておりましたが、ふだんは至って元気で十月六日まで寺役をつとめ七日不調のため病臥、十一日入院、三日目に病状急変という経過をたどりました。六月の御遠忌を現役の住職として健在中に勤め得ましたことは不幸中の幸い大安堵の上、往生の素懷を遂げました。十六日の葬儀には本山仏光寺の御代香があり御門主様から寂靜院釋惠応の法名を賜り門信徒多数の方々

の御会葬を頂きました。本年十月十四日の命日の一周忌法要には満堂の御参詣御焼香を賜り本当にありがとうございました。ここに生前故人に寄せられました

た御懇情に対し心から厚く御礼を申し上げます。大正十二年八月から昭和五十八年七月までの満六十年間広福寺の寺門経営に当たりこの間火難による堂宇の焼失、再建という苦難の道を門信徒の皆様とともに歩んでまいりました。宿願としていた御遠忌を花道に住職を引退し、「開山聖人の御あとをしたひ、声に余言をあらはさず専ら称名念仏して蓮花蔵界ときこえたる無量光明土にいたる」ことのできましたことは、ひとえに大悲の仏恩と仰がねばなりません。△写真は昭和五十八年八月撮影の近影

住職柏原恵信記△

△前住職の経歴▽ 明治31年11月27日生まれ

同39年6月 親鸞聖人六百五十回御遠忌当寺に勤まる。同44年4月 仏光寺本山で得度、寺格を継承 本山の六百五十回御遠忌に少年僧で参列 大正12年3月 龍谷大学文学部卒業、帰寺 同年5月 船越浄源寺住職佐々木浄道長女初枝と結婚 同年8月 住職法道東京別院輪番として出向 この時から事実上住職として寺務をとる。昭和11年11月 住職輪番辞任、帰寺 同12年3月 広福寺住職を継承 同15年5月 当寺から出火、堂宇を全焼し類焼29戸に及ぶ 同年6月 焼け木を使い仮鐘楼建立 同年11月 仮本堂へ御遷仏 同25年8月坊守死去 同28年11月 本堂再建、御入仏慶讃法要勤修（火難から再建までについて住職の克明な記録「火難・復興記録」上下二巻がある）一般社会の公職としては同12年方面委員 同21年民生委員等を26年まで15年間務め以後公職辞退、晩年文化財保護審議会委員を務める 同36年本山の夏安居副講春安居副講、本講、宗学院研究発表などを命ぜられること数回 同39年 助講師 同56年副講師の学階を授けられる 同57年 住職として45年にわたる門信徒教化、宗門発展の功で表彰される。同58年6月 親鸞聖人七百回御遠忌（二度目）当寺開創四百周年記念法要を勤修 同年7月 住職を辞任 同年10月14日 急性腎不全のため84歳で死去

## ホンモノに生きた人

聖徳寺住職 窪 沢 泰 忍



人間一生の間に、種々の人と出会う。しかし仲々ホンモノにめぐり会う御縁は少ない。世渡り上手の人は沢山いるし、かしこい人や、やり手も少なくないが真実の自分をほりあてて生きる人は少ない。

故柏原恵応師は人間としてホンモノの歩みをした人だと思う。ネテモサメテモヘダテナク南無阿弥陀仏ヲトナウベシとは、親鸞さまのお言葉だが、大変なオコトバだ。自分の上にアグラをかいて一生を送り、形の上では派手な生きざまや華麗な渡世をする群像をみてどうも「ハテナ」がぬけない。この人は身のある所お念仏をこぼしながら一生を終わられた人である。すばらしい。お念仏をこぼされたあととは、きっとだれかがひろってゆくだろう。ホンモノだからだ。仏法を謹厳に学ばれた本山の学階高く、晩年時々本山で講義をされたが、故人の総面目はお念仏に生きぬかれた人生にあると私は思う。

大正十五年の夏、小学校二年生の私は初めてこの人と出会った。私の寺の遠忌の時だった。大学を出られたばかりの青年僧で、その時モノヤワラかな感じをうけた。五十九年前

のことである。また再びこれから京都へ行つて勉強したいお顔をしておられた。お父上が東京別院輪番という外向的タイプのため、やむなく寺役という法事、葬式、命日のおつとめに歩き出された。すなおにである。お父上が帰ってこられて間もなく、思いもよらぬ寺からの出火で檀信徒が類焼した。さらに追っかけるように内助の功の坊守さまが大事な時に急逝された。親さまの兄弟が多く御自分の兄弟、子供さんもかなり沢山なので、戦中戦後にかけて身のまわりの多忙だけでも想像できる。寺から出火して檀中の類焼という不可抗力な悲劇は、寺の住職として活動力を永くケンセイする不幸な出来事であった。その内面的な苦痛を次々とかみしめながら、おそらく独り寝床をぬらして男泣きをされたこともあろうと思われる。

晩年は、あくまでもおつとめを続けながらお念仏の中で八十数年の生涯をかみしめてゆかれた。俗っぽい言い方だが私たち男は、とかく花道を歩きたがる。時には病的なほどの執念が目立つ。御老僧は花道には似合わない壮年期をすごされた。それだけにお念仏が深ま



った。だれが称えなくとも、お念仏は寂として満堂にひろがった。お念仏申せぬ自我の群れの中で。親鸞さまのおっしゃるように、そらごとたわごとの人間の生きざまの中に、お念仏だけが太行（だいぎょう）であり、すべての生活現象をホンモノにする如来のめぐみである。六十年間おつきあいしたわが法中の長老柏原恵応師をホンモノの人として、死なれてますます尊崇してやまない所以である。

## 御老僧様の死を悼んで

心光寺住職 柏原 善了



昭和五十八年十月十四日午後四時七分。御老僧様はお念仏の声とともに弥陀のお浄土へお還りになられました。

その二時間前にお会いした時、ほんとにお気は確かでしたのに、急逝され八十六歳の生涯を全うされました。常日頃、お元気な御様子に接して

おりまして、米寿は必ずと確信してもおりましたのにこの世の無常を痛感した次第です。生前は毎日の生活がまことに規則正しく、お朝事は必ずといっていいほど六時半、お寺役も朝きまった時刻に寺を出られ、お勤めを果たしておられました。バス時刻の都合によってはお歩きになられることなど何とも思わず元気な足どりでコツコツと靴音を立てておら

れました。雨天の日は自室でお聖教を拝読され、晴天の日はよく庭掃除をされ、「除草を始めると余念がなく時間のたつのを忘れてしまふ」とも申されておりました。「おれが死んだら、あんな立派な祭壇などいらないし供花もタマツバキで沢山だから」とよく申されておりましたがいつお浄土へ還帰してもよいというおまかせの念仏生活でおられました。

十月は私が六時の鐘をつく番で、つき終わって内陣の祭壇前でお写真を拝みながら偈文を読誦している中に、声がつまってきて時々経文が声になって出なかったりすることが

## 涅槃寂靜の大往生

葬儀委員長 山 岸 義 正



あの何ともいえないありがたい読経、澄んだ声、そしてお念仏、丈夫で足の達者な老僧の急逝に驚いたのは私だけではあるまいと思いません。想えば五十年にわたる住職の職責、年若くして坊守を亡くし孤独の人生を送ること三十数年、この間寺の火災にあり、再建への苦勞と努力、八十四年の生涯も人一倍苦難を加えて孤独のさびしさの中で過ごされたことであろうと察せられてなりませぬ。博学でよく書を読み、また書画をたしな

ありましたが、何かを語りかけておられるように感ぜられてなりませんでした。

晩年、自室でおすわりになっておられるお姿は、あの有名な国上の良寛様に変よく似ておられました。こんな立派な御老僧様がなくなれたことは檀信徒は勿論のこと、村全体の大きな悲しみと言わなければなりません。でも私たちは御遺徳を胸にお念仏の日暮らしをしたいと思ひますし、また私たちの称えるお念仏の中にお浄土があり、そのお浄土に御老僧様が生きておいでになれることをいつまでも忘れないようにしたいものです。

み能くすることは広く人の知るところで遺墨は村内外の門信徒の家々に数多く飾られています。昭和五十六年仏光寺本山から副講師という学階を授与され本人も喜んでおられました。宗門でも老僧の学問は名高いものがあります。長い間孤独の中でひたすら宗学の研さんと檀家回りの読経を勤められ、近年は生き仏の風貌と風格のうかがえる老僧尊嚴の一面でもありました。念仏一筋に生き、死に臨んでも苦しむことなく涅槃寂靜の大往生であつたと聞いています。私が病床を見舞ってから三十分後のことでありました。

突然の逝去のあわただしさの中で迎えた葬儀には檀信徒の皆様方の格段の御協力を頂きしめやかなの中にも厳肅に勤めさせて頂き本当

にありがとうございました。多数の皆様から御会葬御焼香を賜り多大の御香資御供物を頂きました。心から厚く御礼を申し上げます。何分にも欠礼、不行届きの点おわび申し上げます。お許しを賜りますようお願い申し上げます。今は亡き老僧のありし日の面影をしのび、皆様から寄せられました御厚志に心から感謝し御礼のごあいさついたします。

## 日夜お念仏一筋に

門 徒 松 井 信 市 郎



柏原山広福寺第十四世の御老僧は六月の御遠忌当時、とてもお元気で住職としてねんご

ろに、とどこおりなく大法要を勤められました。仏学は申すに及ばずかわら書画を楽しみにしておられました。四十有余年の間ずうと毎月通い続けて月経においてになり祖先の霊を供養して下さったのです。九月八日のこと、月経において下さって御院主様いわく「ジャー筆書いて持ってきたよう」開いてみると、「寂靜無所着」(寂靜にして着する所無し)と「無量寿」の二幅が入っている。恐らく御老僧晩年最後の揮毫を頂戴したことを喜んでおります。親切に解説を書いて下さり八寂靜とは涅槃と同意、阿弥陀仏のお悟りの心、煩惱を離れ物事に貪着する念が



# 寂靜無所著

なく心が乱れることがないので寂靜といふのであります。正信偈に「速やかに寂靜無為の樂に入る」とある御文と同意、無為も涅槃のことであります。また八仏の悟りに入れば生死の苦を離れておいでになるから仏の寿命は無量寿命であります。阿弥陀仏になりますと御自分だけでなく一切衆生全部の寿命を得させ悟りを得させて下さる仏でありますから特に阿弥陀仏を無量寿仏と申すのであります。とするされています。

それから十月八日のこと、近頃おからだの具合が悪いと聞きお見舞に伺った時臥しておられた。「おからだの具合はどうだね」と伺うと御院主様いわく「ジャ、もうお迎えがきとう」と三言おっしゃって下さった。思い起こせば、親しみのあるお方、ああ、これが私への心のふれ合い、うるわしい人生のしめくり、現世のお別れのお言葉であったと思う。御院主様は日夜お念仏一筋に生き、真如の法を悟った正覚者で、もはやその時御自分の死ということがおわかりになる。それから三日後の十一日、県立吉田病院に入院され十月十四日午後四時七分、お念仏とともに八十四歳の生涯をもって天寿を果たし安樂浄土の蓮

の華のうてなの上に安らかに還帰なされたのであります。

私は今合掌して、あの寺役においでの際の後ろ姿を思い拝む時、親鸞聖人御一代記の中にある墨染めの法衣姿の御影像そっくり、お念仏一筋に生き抜かれた求道者でありました。私は仏恩を謝するとともに謹んで御冥福を念じ上げます。

△分水町 長辰△

庭園の石組みを余念なくスケッチ

前住職最後の旅となった文化財研修

死去の半月前の九月二十九日、村の文化財保護審議会委員の研修旅行があり、前々から楽しみにし当日はいそいそと出かけました。

晩年の画は物いわぬ庭石のころ、いのちにふれようとするかのように好んで石を描いたようです。この日新発田市の清水園の庭園で委員の記念写真に入る時間も惜しみ庭の石組みを余念なくスケッチしていたということです（写真）。これが前住職にとって最後の写真となりました。

## 広福寺第十五世住職を継承

昨年六月の御遠忌をすませた七月十三日に前住職が辞任、寺則により柏原恵信が広福寺第十五世住職を継承することになりました。同日、世話方代表の山岸義正氏と同道上洛し本山仏光寺黒書院で御門主様から住職を任命されました。ついで七月十八日宗教法人代表役員変更登記をすませ、十九日本山と新潟県



知事に変更届を提出し宗教法人法上の手続きを完了しました。未熟ではあります。が今後寺

門経営に専念いたしたく門信徒各位の御支援御協力を賜りますようお願い申し上げます。

△略歴△昭和15年4月得度、僧籍に入り寺格を継承、同22年教師拝命、同23年龍谷大学文学部卒、同24年学階准学師授与、同28年龍谷大学研究科卒、同58年7月広福寺第十五世住職（代表役員）となる。

△教職歴△昭和23年京都女子高校教諭、同26年京都女子大学短期大学部講師、同28年新潟商業高校教諭、同37年吉田商業高校教諭、同58年3月教職を退職。

